福岡市埋蔵文化財調査報告書 第981集

那珂 48

－ 那珂遺跡群 第112次調査の報告 －

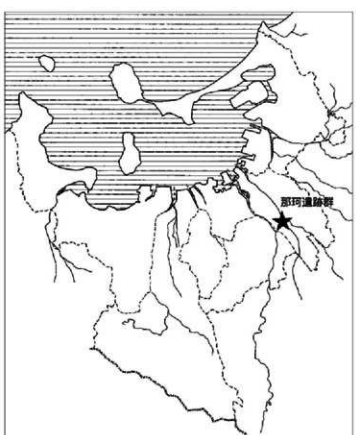
2008

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第981集

那珂 48

－ 那珂遺跡群 第112次調査の報告－



調査番号 0602
遺跡略号 NAK－112

2008

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存につとめているところです。

本書で報告いたします那珂遺跡群周辺は「奴国」の中心地として全国でも特に繁栄を極めた場所であり、これまでに弥生時代から古墳時代にかけての住居や古墳などが調査されており、大陸の先進技術や文化の流入を示す貴重な遺物がみつかっています。

今回の調査でも「奴国」時代の集落が発見され、この時代の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査において費用負担をはじめとするご協力を賜りました亀井サヨ子様に厚くお礼申しあげます。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　言

(1)　本書は、福岡市教育委員会が平成18(2006)年度に博多区東光寺町で、費用を原因者負担の民間受託と一部国庫補助金で実施した那珂遺跡第112次調査区の発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は福岡市教育委員会がおこなった。調査着手時は大塚紀宜が担当したが、人事異動にともない表土剥ぎと一部遺構掘削を始めた時点で加藤隆也が引き継ぎ調査をおこなった。

(3)　遺構の実測と写真撮影は大塚紀宜と加藤隆也がおこなった。

(4)　出土遺物の整理作業は加集和子、山本良子がおこなった。

(5)　出土遺物の実測と写真撮影は加藤がおこない、浄書は加集がおこなった。

(6)　本書に使用した方位は座標北であり、今回の調査・報告に係る座標は日本測地系(第Ⅱ系)座標を使用している。方位は真北より0°19′西偏する。

(7)　調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに ……1
　1　調査に至る経緯 ……1
　2　調査の組織 ……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 ……1
第Ⅲ章　調査の記録 ……4
　1　調査の概要 ……4
　2　遺構と遺物 ……6
　3　まとめ ……20

挿図目次

Fig. 1　那珂遺跡群と既調査地点図（1/8,000）……2
Fig. 2　調査区周辺旧地形図（昭和初期 1/4,000）…3
Fig. 3　調査地周辺図（1/500）……4
Fig. 4　那珂112次遺構配置図（1/200）……5
Fig. 5　SC-01,02,03実測図（1/60）……7
Fig. 6　SC-01,03出土遺物実測図（1/1,1/2,1/3,1/4）…8
Fig. 7　SC-04,05,06,07実測図（1/60）……9
Fig. 8　SC-05,06,07出土遺物実測図（1/3,1/4,1/6）…10
Fig. 9　SC-08,09実測図（1/60）……11
Fig.10　SD-01,02実測図（1/60）……13
Fig.11　SD-01出土遺物実測図（1/4）……14
Fig.12　SD-02出土遺物実測図（1/2,1/4,1/6）……15
Fig.13　SB-01,02、SP、SE実測図（1/80,1/40）…17
Fig.14　SD-03、SK-01,02,03実測図（1/40）……18
Fig.15　SK、SP、その他の遺物実測図（1/3,1/4）……18
Fig.16　周辺調査状況図（1/400）……19

図版目次

PL. 1　1）調査区北側完掘状況（東から）
　　2）調査区南側完掘状況（北東から）
PL. 2　1）SC-01西半状況（北から）
　　2）SC-01東半状況（東から）
　　3）SC-02完掘状況（北西から）
　　4）SC-03,04検出状況（北西から）
PL. 3　1）SC-05完掘状況（北東から）
　　2）SC-06検出状況（北西から）
　　3）SC-06遺物出土状況（東から）
　　4）SC-07完掘状況（西から）
PL. 4　1）SD-01掘削状況（南西から）
　　2）SD-01遺物出土状況（南東から）
　　3）SD-02掘削状況（南西から）
　　4）SD-02遺物出土状況（南東から）
PL. 5　1）SD-03完掘状況（南西から）
　　2）SK-01掘削状況（北西から）
　　3）SK-02完掘状況（北西から）
　　4）SK-03完掘状況（北西から）
PL. 6　竪穴住居、溝、土壙出土遺物（縮尺不同）
PL. 7　SD-02出土遺物（縮尺不同）
PL. 8　その他の遺物（縮尺不同）
　　SC-06出土　鋳造鉄斧X線写真

第Ⅰ章　はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年11月28日、亀井サヨ子氏より福岡市博多区東光寺町２丁目89番地内における共同住宅建設計画に先立って「埋蔵文化財の有無について」の照会文書が埋蔵文化財課事前審査係に提出された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内にあり、また東側隣接地は第109次にて調査を実施しているため12月15日試掘調査を行った。その結果現地表下約１ｍのローム層上面にて土壙、竪穴住居跡などの遺構が遺存していることを確認した。この結果をもとに協議を重ねたが、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査により記録保存することとなった。発掘調査は平成18年4月3日から着手し、途中人事異動により調査担当を交替し、5月26日に調査を終了した。

発掘調査から整理・報告にいたるまで、施主の亀井サヨ子氏、大和ハウス工業株式会社をはじめ関係者の皆様からご理解いただくと共に、多大なご協力を賜り順調に作業が進み報告書を作成することができました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者		亀井サヨ子
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財第２課長	力武卓治
	埋蔵文化財第２課第１係長	池崎譲二（前任）
	埋蔵文化財第２課第１係長	杉山富雄（現任）
事務担当	文化財管理課	鈴木由喜
調査担当	埋蔵文化財第１課	大塚紀宜
	埋蔵文化財第２課	加藤隆也
調査作業	伊藤美伸　桑原美津子　吹春憲治	林　厚子　乾　俊夫　米良恵美　渡邉和幸
	近藤末孝　水野由美子　芹川淳子	尊田絹代　徳山孝恵　北野宏行
整理作業	加集和子　山本良子	

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する。現在120次に及ぶ発掘調査がおこなわれている。古くは旧石器時代の遺物が散布するが、その様相は後世の人為的活動が活発なこともあり、明らかではない。弥生時代早期（縄文時代晩期末）には環濠集落が台地の西側に出現し、その後古墳時代にかけて那珂遺跡群を含む春日市から博多駅に続く須玖岡本丘陵上には集落跡が密に広がり、溝による区画や道路なども敷設され一大拠点集落が形成される。飛鳥時代以降では、正方位をとる大型建物の柱列や瓦などが出土しており、筑紫大宰や那珂郡衙の可能性が指摘されている。中世以後も堀と思われる大溝が巡り、屋敷の存在が全域からうかがわれる。

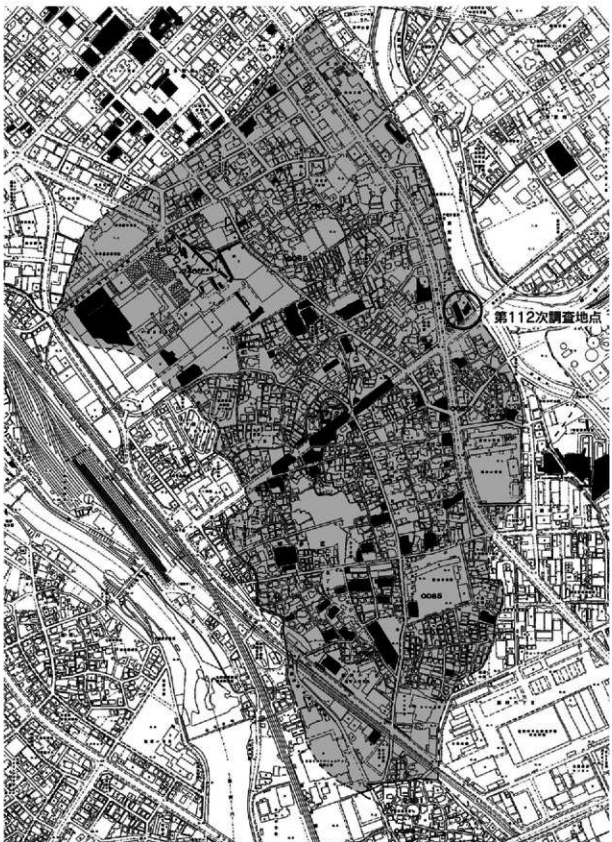


Fig. 1　那珂遺跡群と既調査地点図（1/8,000）

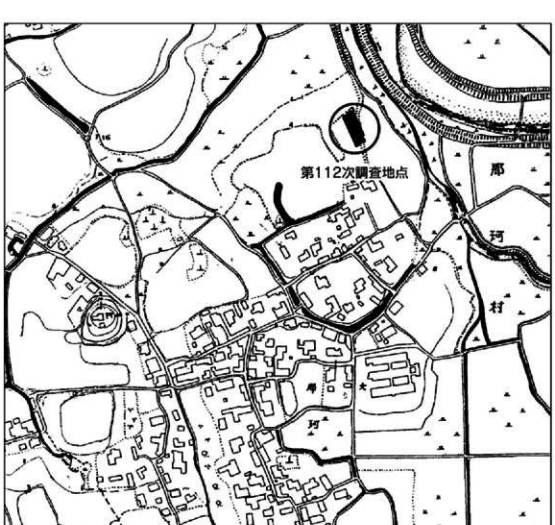


Fig. 2　調査区周辺旧地形図（昭和初期　1/4,000）

本調査地は、那珂遺跡群中央部の東縁部に位置する。東側約15mには諸岡川と合流した御笠川が北流している。調査で確認された遺構検出面の高さは北側に向けて緩やかに傾斜している。御笠川の当時の流路は不明であるが、遺構の残存状況から現在より更に東側に離れていたと思われる。東側隣接地は第109次にて調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第937集）されており、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構が検出されている。特筆すべきものに、井戸から出土した鹿に戈と盾の絵画が線刻にて描かれていたことがあげられる。これら描かれた武器類は権力者の象徴であり、当時の祭祀行為を考察させる貴重な資料である。また、西側隣接地の南側は第116次にて調査されたが、後世の削平のため弥生時代遺構の残存は、あまり良好ではなかった。弥生時代の竪穴住居は削平を受け、かろうじて床面が遺存する状況であり、中世の井戸などが調査された。

第Ⅲ章　調査の記録

1．調査の概要

今回の調査では、調査地内の土砂を搬出する計画のため、まず南道路側の西半分部分を先行調査し、記録をとった後、その部分を廃土置場として他の調査を終えることとした。そのため、その部分で検出された竪穴住居SC-01の全体写真は撮影できなかった。また、調査担当者が人事異動にともない調査前半時の4月20日をもって、大塚紀宣から加藤隆也に引き継ぎがおこなわれた。

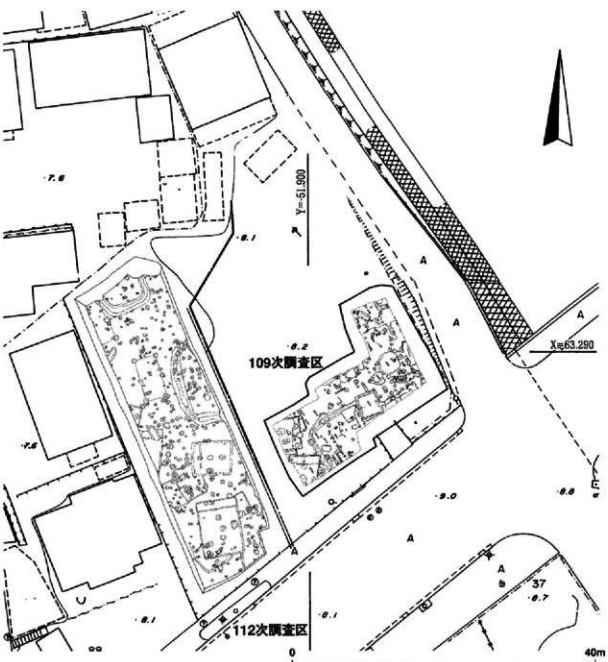


Fig. 3　調査地周辺図（1/500）

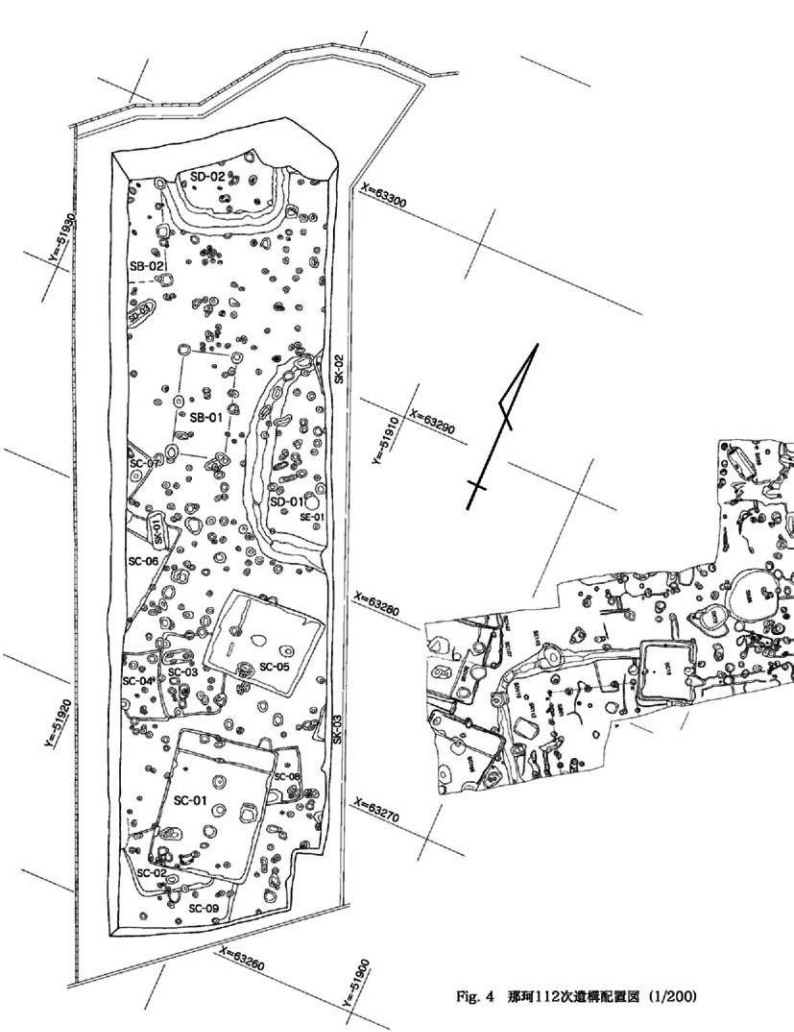


Fig. 4　那珂112次遺構配置図（1/200）

基本的な層序は40～120cmの盛土下に以前の耕作土とみられる灰褐色土が堆積する。その下に褐色の遺物包含層が厚さ約15～20cmで堆積しており、その下層が遺構検出面である地山の鳥栖ローム層となる。この遺構検出面は北側に向かって緩やかに傾斜しており、その比高差は120cmにもなる。竪穴住居９軒、掘立柱建物２棟、土壙３基、方形周溝状遺構２基の調査をおこなった。

2．遺構と遺物

竪穴住居（ＳＣ）

今回の調査では９軒の竪穴住居跡を検出した。小型方形プランをもつものは総じて遺存が悪く、具体的な構造を把握することができなかった。ベッド状遺構を敷設する長方形住居跡は、第109次調査でも指摘されているように、その配置方向に強い関連性がうかがえる。今回の調査地内においては、古墳時代初頭にかけての住居跡の残存が最も良好であった。

ＳＣ-01（Fig.5、PL.2）

調査区南側にて検出された。廃土置き場確保のため約半分ずつの調査となった。SC-02、08、09を切る。長軸長約7.5m、短軸長約5.4mの長方形プランの住居である。周辺調査においても大型である。SC-06と第109次調査のSC108とは同一方位に掘削されている。住居内北側に地山削り出しと薄い貼り床によるベッド状の段を敷設する。その残存高は約15cmである。南側の反対側には同様の施設はみられなかった。ベッド状以外の床にも薄く貼り床がみられ、主柱穴の掘り方は貼り床を剥いだ面で検出した。主柱穴は２本で、その中央部に炉が位置する。壁際の溝は住居の外周を巡ると思われ、東側中央部は一部途切れる。その部分に幅約1m、深さ約30cmの土壙がみられる。主柱穴の掘方は床面から80cm以上掘削されており、底面に柱痕跡がみられるものもあった。中央炉の底面は被熱により赤褐色に発色し、黒褐色の炭化物が薄く堆積していた。**出土遺物**(Fig.6、PL.6)**1、2**は甕の上半部の破片である。内外面にハケメが残る。1の復元口径21.4cm、2は16.2cm（復元）である。**3、4**は甕の底部破片である。どちらも丸みをもった平底である。**5**は土製の投弾である。ラグビーボール形を呈しており長さ4.2、胴部径2.4cmである。**6**は緑灰色の石製円盤である。形状は最大径5.8cmのやや楕円を呈し、暑さは約8mmである。側面には２箇所、線状に削った跡がみられる。**7**は石包丁の破片である。青灰褐色に発色し、刃部は欠損している。**8～12**はガラス小玉である。床面上からみつかった。最大径と長さは8からそれぞれ7.3・6.0、3.1・3.3、3.2・2.5、3.0・2.2、3.8・2.2mmである。遺構の時代は遺物から弥生時代後期後葉と考えられる。

ＳＣ-02（Fig.5、PL.2）

調査区南端にて検出された。SC-01に大きく切られ、一部を撹乱によって失っている。平面形が短辺3.5m、長辺約４mの隅丸の方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。削平が著しいが壁際に周壁溝の一部を残す、主柱穴、炉などの構造は不明である。時代を示す良好な資料は出土していない。

ＳＣ-03（Fig.5、PL.2）

調査区南側西寄りにて検出された。SC-05に切られる。遺存が悪く精度を欠くが、遺構検出作業ではSC-04を切るようにみえた。平面が短辺3.6m、長辺4.3mの隅丸の方形を呈する竪穴住居と考えられる。削平が著しく、床面のみが遺存する。遺構内に多くのピットがみられるが主柱穴の特定はでき

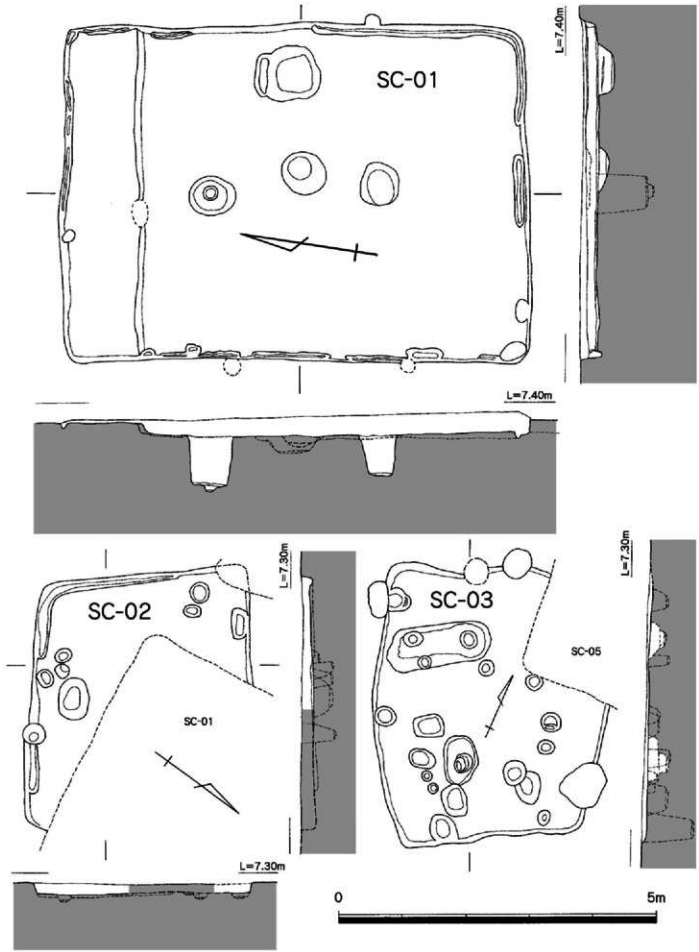


Fig. 5 SC-01,02,03実測図(1/60)

なかった。**出土遺物** (Fig.6、PL.6) **13**は丹塗りの高坏の脚部破片である。南西隅の浅い凹み上にて出土した。外面は丹塗りである。内側に絞り痕が残り、脚の長さは低い。底径18.4cmである。同時に甕の胴部破片が出土しているが、その出土範囲はSC-04側にも一部およぶため、この住居に伴う遺物であるかどうかは判断できない。

SC-04 (Fig.7)

調査区南側西端にて検出された。遺構の一部は調査区外にのびる。削平を著しく受けており、床面までの深さは数cmしか残存していなかった。復元される規模は長軸長3.6m、短軸長は2.4m程度の平面が長方形を呈する遺構と考えられる。住居跡としては、いたって小型であるため住居跡以外の可能性も考えられる。主柱穴や炉などの性格を示す構造的なものは不明である。**出土遺物** SC-03でも記述したが甕の胴部破片以外、床面レベルでの遺物はみつかっていない。

SC-05 (Fig.7、PL.3)

調査区南側中央部にて検出された。SC-03を切る。遺構の遺存は良好であり、検出面から床面まで約50cmである。長方形の平面プランをもち、床面レベルで長軸長4.7m、短軸長4.1mの規模で東西方向に長い。東西の壁には途中小さな段がみられ、南北壁際には壁溝が部分的にみられる。主柱穴は2本で、その中間に炉がみられ、南側の壁際には80×80cmの土壙が配置する。床面西側の柱穴際には細い溝状の遺構がみられる。床面は、地山土と黒褐色粘質土の混土により2～3cm貼り床がされていたが、細い溝状遺構の東西で顕著な段は検出されなかった。**出土遺物** (Fig.8、PL.6) **14**は丸底壺

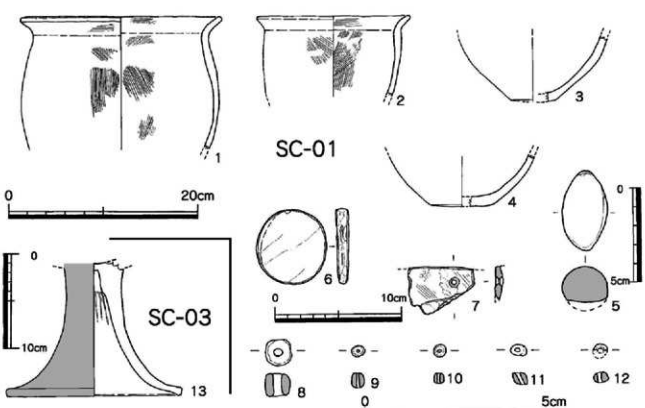


Fig. 6 SC-01,03出土遺物実測図 (1/1,1/2,1/3,1/4)

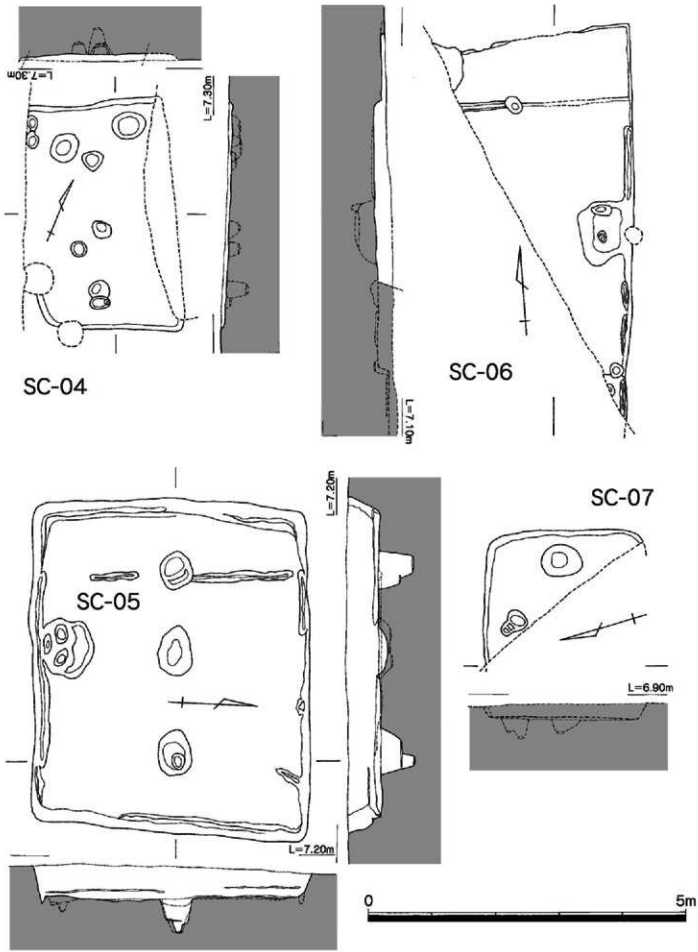


Fig. 7 SC-04,05,06,07実測図 (1/60)

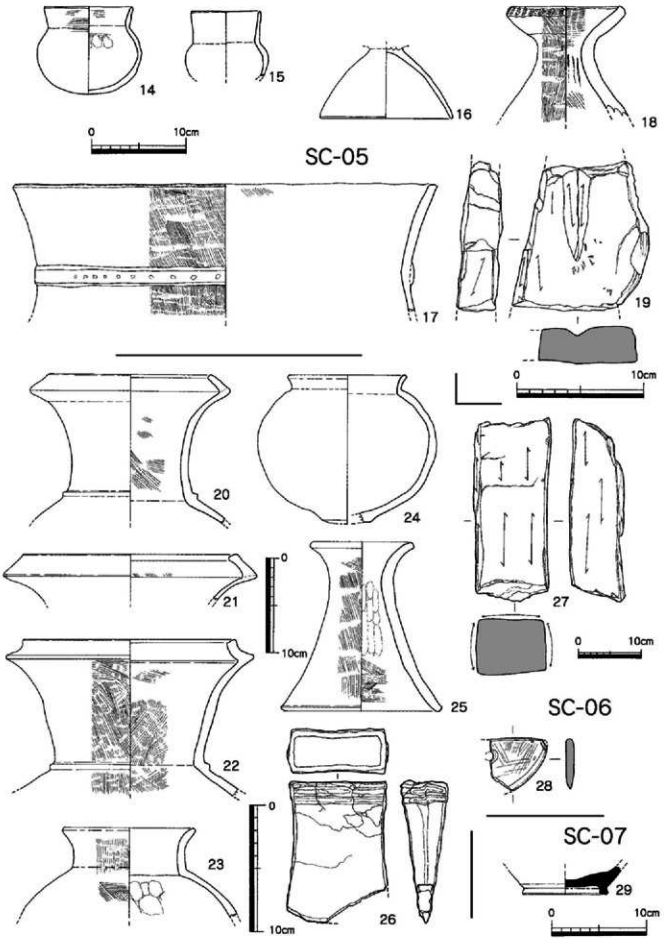


Fig. 8 SC-05,06,07出土遺物実測図 (1/3,1/4,1/6)

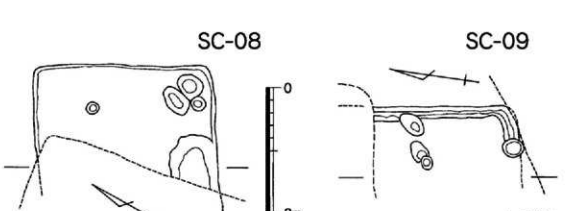


Fig. 9　SC-08,09実測図（1/60）

である。内外面に細かいハケメを施し、肩部内面には指圧痕が残る。口径9.2cm、器高9.3cmである。**15**は精製の丸底壺の破片である。口縁は直線的に上方にのびる。器面は摩滅している。復元口径7.2cmである。**16**は高坏の脚部である。弧を描いて広がる。底径13.8cm。**17**は甕の上部破片である。口縁は直線的に広がり、頸部下に幅広の扁平な凸帯を貼り付ける。凸帯の上にはナデの後、一定間隔で刺突痕が施される。口縁上部には工具による荒い連続文がみられる。復元口径43.2cmである。**18**は器台の上半部である。器面調製は内外面にはハケメで、内面には絞り痕、口縁端部には粗い連続文がみられる。復元口径11.0cmである。**19**は砥石の破片である。灰褐色を呈する砂岩であり２面を砥石として使用している。その広い面には、断面形Ｖ字の研磨痕が残っている。遺構の時代は出土遺物から、弥生時代後期終末から古墳時代初頭と考えられる。

ＳＣ-０６（Fig.7、PL.3）

調査区中央部西端にて検出された。SK-01を切り、その遺構の大半は調査区外に広がる。南北側にベッド状遺構が散設される平面長方形を呈する住居である。SC-01と第109次調査のSC108と同一方位に掘削されている。南側にも地山削り出しによるベッド状遺構の段がみられ、北側と同様にその幅約1.1mと仮定すると長軸約6.5mと推測される。壁際には溝が巡り、北側ではベッド状の段にも細い溝がみられた。北側ベッドの段には深さ約25cmのSP-181があり、これが主柱穴と仮定すれば、住居の短軸長は約3.6mと思われる。東側壁中央部は壁溝が途切れ、100×80cmの土壙を配置している。床面上には、比較的多くの遺物がみられ、壁際の土壙上面からは鋳造鉄斧が出土した。**出土遺物**（Fig.8、PL.6）**20～22**は複合口縁壺の破片である。20、21は床面中央部にて出土しており、口縁部の反転が直線的なラインでのびる。22は、北側ベッド上にて出土し、反転部が内彎気味のカーブを描くタイプである。口径はそれぞれ16.8、22.4（復元）、22.3（復元）cmである。**23**、**24**は壺である。23の口縁は直線的に上方にのびる。口径13.2cm、24は摩滅が著しく器面調整は不明である。底部はやや丸みをもっている。口径12.2（復元）、底径5.1（復元）器高15.7cmである。**25**は器台である。内外面にハケメが残り、口径10.9（復元）、底径18.1（復元）、器高17.9cmである。**26**は２条の凸帯をもつ鋳造鉄斧である。壁際土壙の上面から出土した。刃部の一部を欠損しているが、遺存状態は良好である。Ｘ線写真ではナカゴの刃部中央に張り出があることがわかる。**27**は砂岩製砥石の破片である。大型のもので残存長29.3cmで、３面を砥石とし使用している。**28**は石包丁の破片である（立岩産か）。遺構

の時代は出土遺物から、弥生時代後期後葉と考えられる。

SC-07 (Fig.7、PL.3)

調査区中央部西端にて検出された。遺構の大半は調査区外に広がる。検出面から床面まで約20cm残存していた。一辺約2.5mの略方形の平面を呈する小型の竪穴住居と考えられる。床面には幾つかのピット状の遺構がみられるが上屋構造をしめす主柱穴は特定できなかった。**出土遺物** (Fig.8、PL.6) **29**は須恵器の高台付坏である。高台はやや外に踏ん張る。遺構の時期は出土遺物から奈良時代のものと考えられる。当該期の遺構はこの遺構のみであるが、隣地の第109次調査では、一辺約3mの平面正方形を呈し、カマドをもつ竪穴住居が検出されている。遺構の密度は高くないが、散漫な状況で広く分布するようである。

SC-08 (Fig.9)

調査区南側東端にて検出された。SC-01に切られる。削平を著しく受けており、床面までの深さは数cmしか残存していなかった。復元される規模は一辺2.8m程度の平面が方形ないしは長方形を呈する遺構と考えられる。主柱穴、炉などの遺構もみられなかった。遺構の時期をしめす遺物も出土していない。

SC-09 (Fig.9)

調査区南側端にて検出された。SC-01に切られる。削平を著しく受けており、壁際を巡ると考えられる小溝の一部を確認したにすぎない。小溝に幅は約15cmで途中ほぼ直角に屈曲する。この住居跡プランに沿う柱穴などはみつかっていない。

周溝状・溝（SD）

今回の調査では2基の方形の周溝状遺構を検出した。第109次調査においても同様のSD110があり、近接して複数の遺構が構築されたと考えられる。ただし、それらの遺構には遺物の出土状況をはじめ規模や構築時期などに差異がみられる。

SD-01 (Fig.10、PL.4)

調査区北側東端にて検出された方形周溝状遺構である。SK-02に切られる。幅50～110cm、深さ10～40cmが残る。断面は緩やかなU字形を呈する。遺構検出面は北側に傾斜するため北側の残存が悪いと考えられ、底部のレベルは南北で大きな高低差はみられない。土層断面の観察では底面にまず黄褐色の地山ブロック層が堆積し、その後黒褐色粘質土で埋まっていくようである。溝の掘り返しの状況はみられなかった。

遺構の北側は幅がやや狭くなりSK-02に切られるが、検出面の傾斜を考慮すれば遺構自体はさらに継続していると思われる。溝の平面は隅丸の方形を呈していると考えられ、その規模は現状溝の外側で約8.5mである。溝区画内には多くのピット状遺構が分布するが、その面積が狭小であることもあり建物として復元できるものは確認できなかった。**出土遺物** (Fig.11、PL.6) 基本的にあまり多くの遺物は出土していない。**30**、**31**は二重口縁壺の上部である。同一個体と思われるが、やや離れて出土した。摩滅が著しく器面調整は不明である。器壁は薄くつくられており、淡黄褐色に発色する胎土は

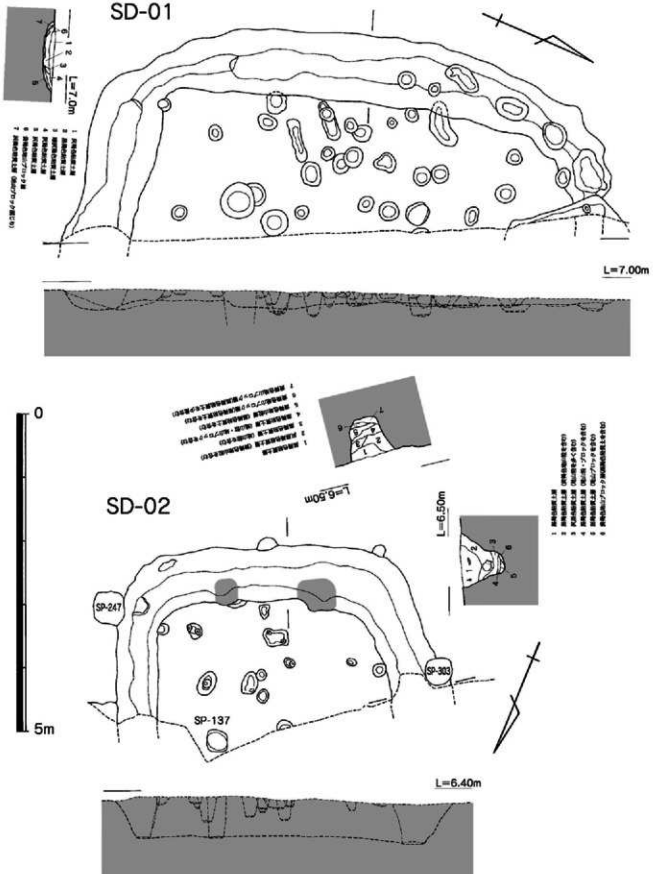


Fig.10 SD-01,02実測図 (1/60)

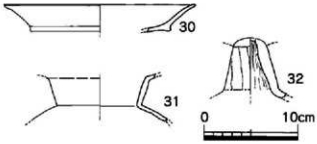


Fig.11　SD-01出土遺物実測図（1/4）

密である。口径20.2cmである。**32**は高坏の脚破片である。エンタシス形に膨らむ。遺構の時代は出土遺物から、弥生時代後期終末から古墳時代初頭と考えられる。

SD-02（Fig.10、PL.4）

調査区北側端にて検出された方形周溝状遺構である。幅90～130cm、深さ70～85cmが残る。断面は逆台形形を呈し、溝の底面は西側がやや深い。溝の最下層は黄褐色地山ブロック層であり、その後黒褐色粘質土により埋没していくようである。SD-01と同様に溝の掘り返し等などの形跡はみられなかった。遺構周辺には掘立柱建物SB-02のSP-303やSP-247、SP-137など平面形略方形の柱穴がみられるが、切り合うものは埋土がどちらも黒褐色粘質土のため、その前後関係は判断できなかった。また、溝の底面の精査時に気付いたのであるが、溝の上端、下端のラインが乱れる場所が2ヶ所みられた（アミカケ部分）。柱穴と思われるが、溝の底面と柱穴の底面にレベル差がほとんどないため、掘削時期に差があると考えられる。SP-247につながる柱穴列の可能性を考えておきたい。周溝の規模は検出された溝の外側で約7.2mと考えられる。**出土遺物**（Fig.12、PL.7）　溝内部から多くの遺物が出土したが、溝の底面に貼り付いて出土したものはなく、中層から上層にかけて出土した。**33、34、35、36、37**は壺である。33の外面は粗いハケメで、内面には細かいハケメが残る。口縁は広がりながら直線的にのびる。底の中央部はやや上げ底気味となる。口径13.6、底径6.1、器高11.7cmである。34は壺の上部破片である。胴部の肩が張っており、口縁は一度すぼまって、その後外へ外反する。器面調整はナデとミガキである。口径13.6cmである。35は完形に復元できた。胴部のカーブは緩やかで、外面にはハケメが残る。内面肩部には指頭圧痕がみられる。底部は丸みを帯びた平底である。口径9.4、底径4.3、器高17.8cmである。36は土層断面図内に描かれている完形の壺である。胴部は大きく張り出し、口縁は上部にのびる。底部は丸みをもった平底である。口径9.1、底径5.9、器高20.5cmである。37は広口の壺で約1/2が遺存する。内外面にハケメが残り、口縁端部には／／形の連続文がみられる。底部は丸みを帯びた平底である。口径19.4、底径6.8、器高35.4cmである。**38、39**は甕である。38は小形の甕で約1/2が遺存する。底部は丸みをもった平底である。口径14.2、底径5.3、器高18.9cmである。39は甕の下半破片である。外面にはハケメが残り、底部は丸みをもった平底を呈する。底径5.9cmである。**40、41**は大型の甕である。40は下半を欠く。内外面にハケメが残り、胴部と頸部に凸帯が2条巡る。口径36.2cmである。41も甕の上半部破片である。口縁は長大なもので、大きく外反する。頸部下には断面四角形の凸帯がめぐる。口縁には∧∧形、凸帯には／／形の連続文がみられる。口径47.1cmである。**42**は器台である。内外面ともにハケメが残る。口径（復元）1.07、底径13.2、器高14.6cmである。**43**は土製勾玉である。やや荒い胎土で、先端を欠く。残存長3.4cmである。遺構の時代は出土遺物から、弥生時代後期後葉と考えられる。

SD-03（Fig.14、PL.5）

調査区北側西端にて検出された。調査区外へとのびており、全体の様相はつかめない。断面形は緩やかな弓字を呈しており、中心部が最も深く約20cmである。土壌の可能性もある。時代を示す遺物は出土していない。

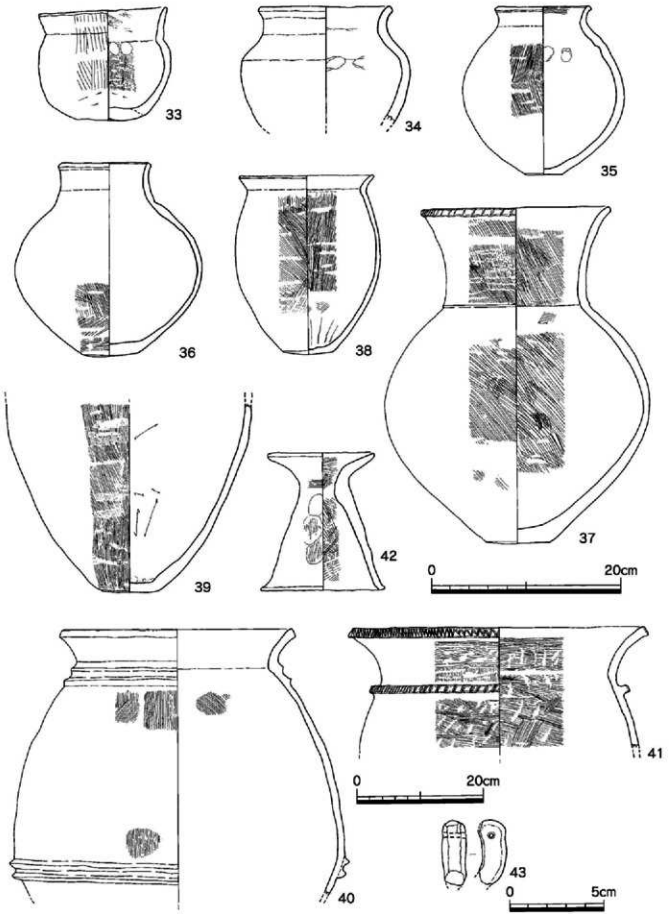


Fig.12　SD-02出土遺物実測図（1/2,1/4,1/6）

掘立柱建物・柱穴・井戸（ＳＢ・ＳＰ・ＳＥ）

今回の調査では多くのピット状遺構がみつかった。そのすべてが柱穴ではないが、ここでは、その配置と形状により明らかに建物として復元できたもののみを取り上げる。

ＳＢ-０１（Fig.13）

調査区北側にて検出された主軸方位をN-17°-W（座標北）にとる１間×２間の掘立柱建物である。桁行全長5.5m、梁行全長2.8mである。柱穴は円形で、直径は50～80cm、深さは30～80cmで比較的しっかりしている。各柱穴から弥生土器片が少量出土しているが時期を示す遺物は出土していない。

ＳＢ-０２（Fig.13）

調査区北側西端にて検出された。SD-02と切り合うが前後関係は不明である。主軸方位をN-23°-W（座標北）にとる。２間分を確認したが先にのびないため西側の調査区外へと広がると考えた。柱穴は略方形であり、一辺60～70cm、深さは70～100cmあり残存は良好である。掘方埋土は黄褐色地山ブロック混じりの黒褐色粘質土を主体としている。約15cmの柱痕跡がみられ、柱間は2.6m前後である。時代を示す遺物は出土していない。

ＳＰ-１３７（Fig.13）

SD-02の内側で確認された略方形の平面をもつ柱穴である。一辺50cm、深さが70cmあり残存が良い。明瞭な柱痕跡はみつからなかったが黒褐色粘質土を主体とする埋土であった。

ＳＰ-２４７（Fig.13）

SD-02と切り合う略方形の平面をもつ柱穴である。一辺70cm、深さ80cm残存していた。底部には段があり、柱痕跡などは確認されなかった。黒褐色粘質土を埋土の主体としている。**出土遺物**（Fig.15）**45**は完形でみつかった長胴、丸底の在地系の壺である。口径10.8、器高18.8cmである。

ＳＥ-０１（Fig.13）

SD-01の内側で検出された井戸と思われる遺構である。直径80cmの平面円形を呈するものである。掘削を始め深さ１mの時点でも、壁はほぼ垂直に立ち地山も白色粘土に変化がないため底面は更に深いことが予想された。調査区際であったこともあり、そのため安全を考慮し、完掘を断念した。掘削土中から遺物は出土していない。

土壙（ＳＫ）

調査区内では３基の土壙を確認した。１基は竪穴住居により上面を破壊されており、残る２基は調査区際に位置するため、その全容が理解できないものであった。ただし平面形が不明な２基は床面状の面とコーナを有しており、竪穴住居の一部の可能性も考えられる。

ＳＫ-０１（Fig.14、PL.5）

調査区中央部西側にて検出された。SC-06のベッド状遺構部に切られる。長方形の整ったプランを

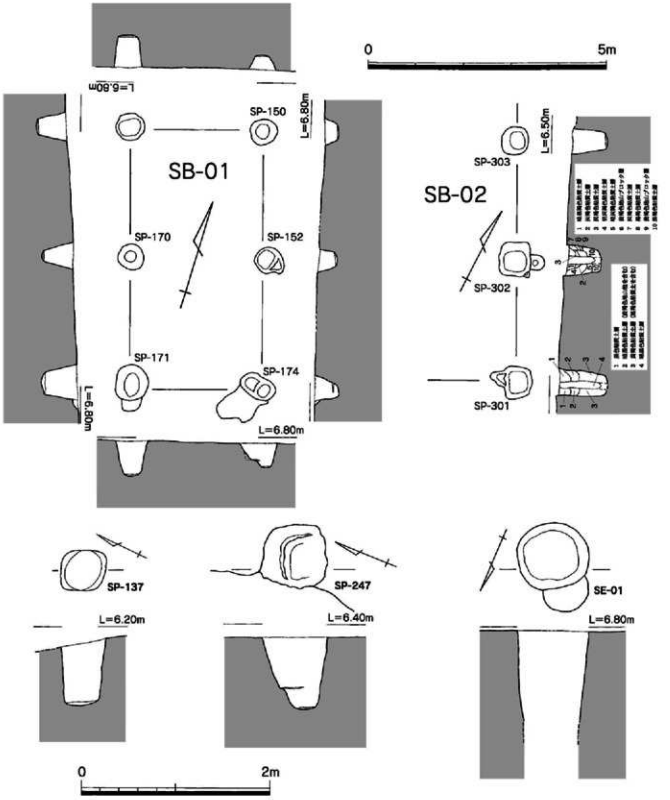


Fig.13 SB-01,02、SP、SE実測図 (1/80,1/40)

※平面図中アミカケは白色粘土

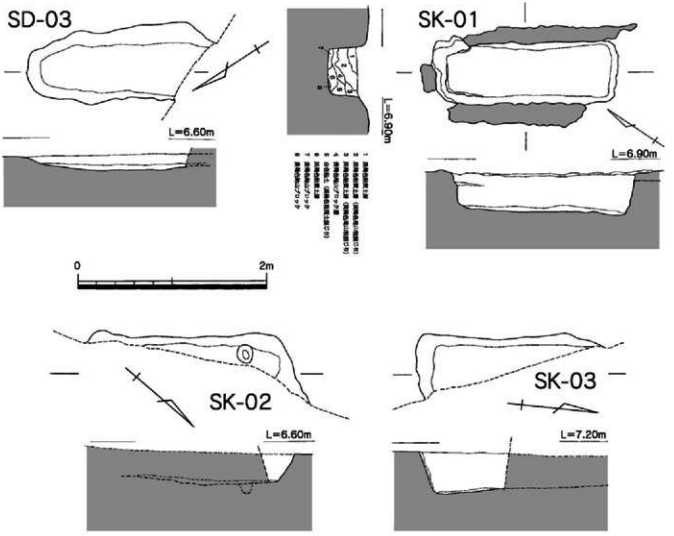


Fig.14　SD-03、SK-01,02,03実測図（1/40）

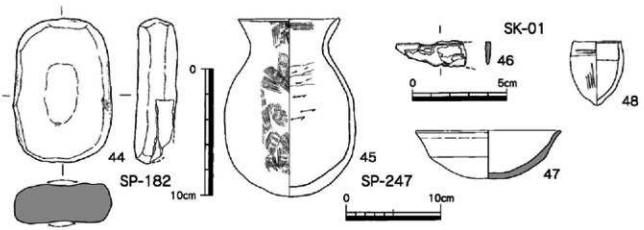


Fig.15　SK,SP、その他の遺物実測図（1/3,1/4）

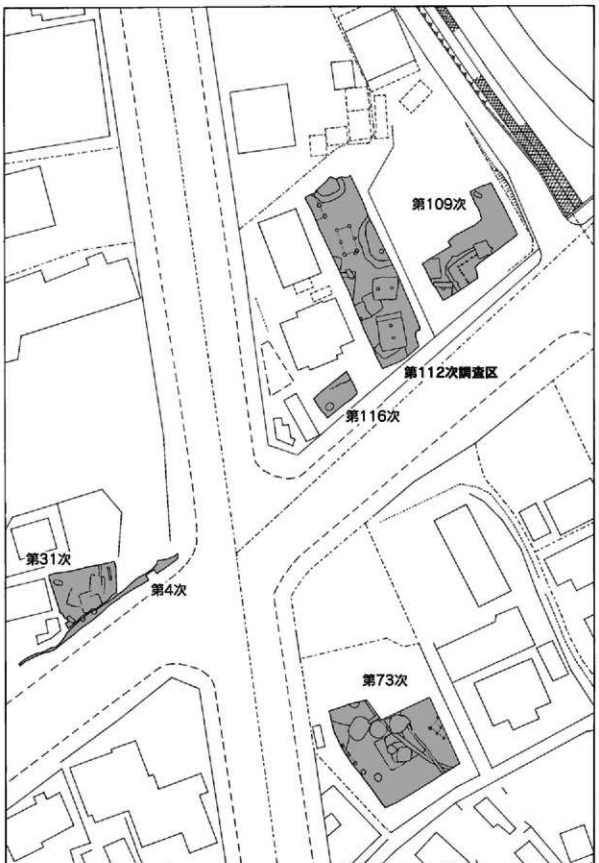


Fig.16　周辺調査状況図（1/400）

有しており、上面には白色粘土がみられる。主軸はN-31°-Wをとる。遺構掘方の上端で長軸長190cm、短軸長65cm、下端では長さ170cm、幅40～55cmと北側が若干狭い。遺構の壁はほぼ垂直に立ち、床面も比較的平坦であった。床面にて木棺等の痕跡に注意を払ったが確認されなかった。白色粘土が遺構周辺を巡ることから、遺構には本来蓋が存在しており、この白色粘土は蓋の目張りの役目を担っていたと考えられる。このことからも埋葬施設と考えられる。**出土遺物**（Fig.15）**46**は鉄器の一部である。同一個体と思われる鉄器片が数点みつかったが、メタルが残るのは図化した部分のみであった。その他土器等は出土していない。遺構の時期は、切り合い関係から弥生時代後期後葉を下限とする。

SK-02（Fig.14、PL.5）

調査区北側東端にて検出され、SD-01を切る。検出されたのはその一部であり、遺構の大半は調査区外に広がる。確認できたのは2.5m程度で遺構のコーナ部分と思われる。遺構検出面より約30cm下に床面と思われる平坦面がみられる。また、その面に小ピットがみられた。時代を示す遺物は出土していない。遺構の時期は、切り合い関係から弥生時代後期終末から古墳時代初頭を上限とする。

SK-03（Fig.14、PL.5）

調査区南側東端にて検出された。検出されたのはその一部であり、遺構の大半は調査区外に広がる。確認できたのは2.0m程度で遺構のコーナ部分と思われる。遺構検出面より約40cm下に床面と思われる平坦面がみられる。遺構の性格、時代を示す遺物は出土していない。

その他の遺物

今回の調査では、遺構検出面の上層に堆積する遺物包含層をはじめ上層から採集された遺物には中世陶磁器や近世・近代陶磁器までみることができる。遺構に伴い図化した遺物以外に、いくつかの遺物を取り上げる。（Fig.15、PL.8）**44**は凹石である。SP-182から出土している。全長11.3、幅7.8、厚さ3.2cmである。**47**は内黒黒色土器の壺である。口径15.3、器高5.1cmである。**48**は手づくねによる小型尖底土器である内外面に丁寧なミガキが残る。口径4.8、器高6.7cmである。

3．まとめ

今回の調査では、周辺調査と同様に弥生時代後期から古墳時代初頭を主体とする集落遺構を確認することができた。特に注目されるものは竪穴住居の配置と周溝状遺構との関係である。那珂遺跡の北側に位置する比恵遺跡の東側では古くから「環溝」として方形周溝状の遺構群が知られている。近年、他の類例から首長居館など一般住居と区別される建物であるとの指摘がされている。隣接する第109次調査の方形周溝でも、溝に沿った柱列が確認されている。また、やや時期はずれるが溝と切り合う井戸からは武具である盾と戈を線刻した絵画甕棺が出土しており、祭祀行為がおこなわれた祭殿等の施設であった可能性があるとしている。

残念ながら今回の調査で発見された周溝ではそれに伴う遺構などは確認されなかった。ただし、2時期ある溝とそれぞれほぼ同時期に構築されたと考えられる竪穴住居が確認されたことは、集落内の空間利用の面などから更なる周溝状遺構研究の深化に貴重な資料となった。

1）調査区北側完掘状況（東から）

2）調査区南側完掘状況（北東から）

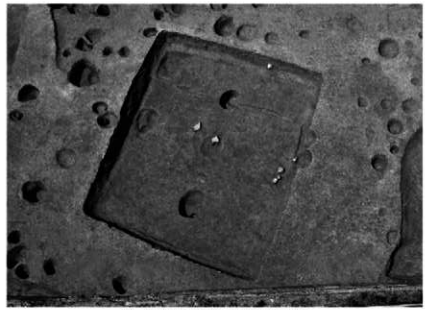
3）SC-02完掘状況（北西から）

1）SC-01西半状況（北から）

4）SC-03,04検出状況（北西から）

2）SC-01東半状況（東から）

3）SC-06遺物出土状況（東から）▷が鉄斧



1）SC-05完掘状況（北東から）

4）SC-07完掘状況（西から）

2）SC-06検出状況（北西から）

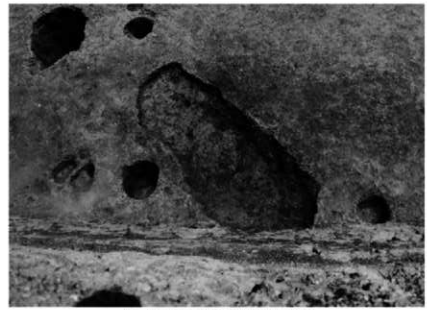
3）SD-02掘削状況（南西から）

1）SD-01掘削状況（南西から）

4）SD-02遺物出土状況（南東から）

2）SD-01遺物出土状況（南東から）

3）SK-02完掘状況（北西から）

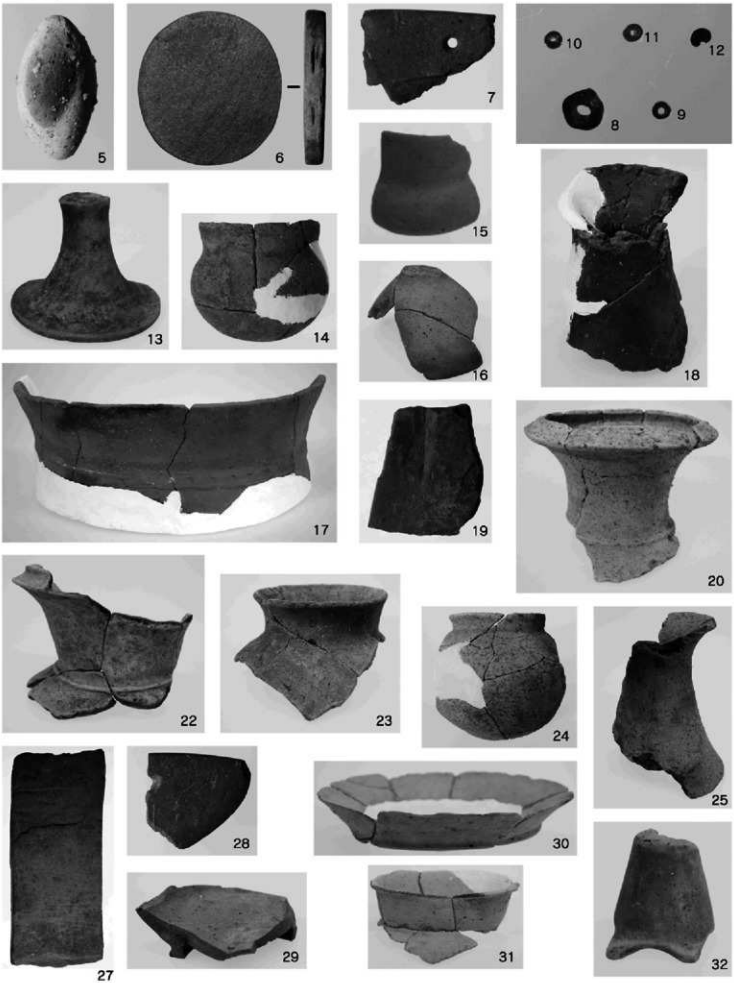


1）SD-03完掘状況（南西から）

4）SK-03完掘状況（北西から）

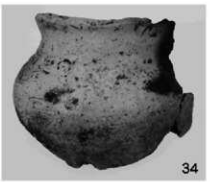
2）SK-01掘削状況（北西から）

PL. 6



竪穴住居、溝、土壙出土遺物（縮尺不同）

33

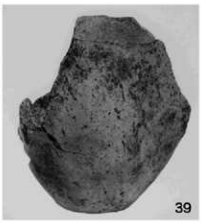

34

35

36

38

37


39

42

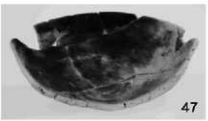
40

41

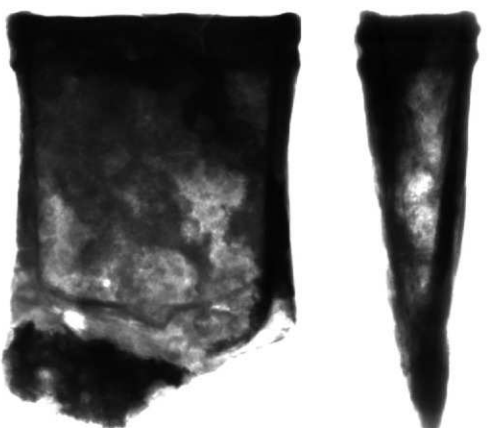
43

SD-02出土遺物（縮尺不同）

PL. 8



その他の遺物（縮尺不同）



SC-06出土　鋳造鉄斧X線写真

－報告書抄録－

書名	那珂48
ふりがな	なか48
副書名	那珂遺跡群 第112次調査の報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第981集
編著者名	加藤 隆也
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20080317
作成法人ID	40137
郵便番号	810-8621
住所	福岡市中央区天神1－8－1
遺跡名	那珂遺跡群
ふりがな	なかいせきぐん
遺跡所在地	福岡市博多区東光寺町２丁目89番地
市町村コード	40137　　遺跡番号0085
北緯	33° 34′ 22″
東経	130° 26′ 18″（世界測地系）
調査期間	20060403～20060526
調査面積	415
調査原因	共同住宅建設
種別	集落
主な時代	弥生時代後期から古墳時代初頭
遺跡概要	竪穴住居９軒、掘立柱建物２棟、方形周溝状遺構２基、土壙、井戸
特記事項	竪穴住居の配置方向、周溝状遺構の検出

発掘作業員のみなさん

建築物完成写真

那珂遺跡群 第112次調査の報告

那 珂 4 8

－福岡市埋蔵文化財調査報告書－

2008年(平成20年)3月17日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
☎ 092(711)4667

印　刷　友豊社印刷有限会社
福岡市南区那の川1－13－16

NAKA 48

— Results of the 112th excavation of Naka sites —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.981

2008

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

JAPAN